

3) 子牛の肺炎

肺炎の発生は、いくつかの原因が重なって生じる場合が多い。よってその予防にも複合的な予防が必要となる。環境的な原因に対する予防については、既に前述しているので割愛するが、その重要性は非常に高い。感染性の原因に対する予防上も、換気や舎内の衛生管理の徹底は感染症の種類を問わない予防法の基本である。特定の時期や特定の症状の肺炎が多発する場合には、原因となる病原微生物を獣医師の協力のもとに特定し、それに合った対策をとることが必要となる。

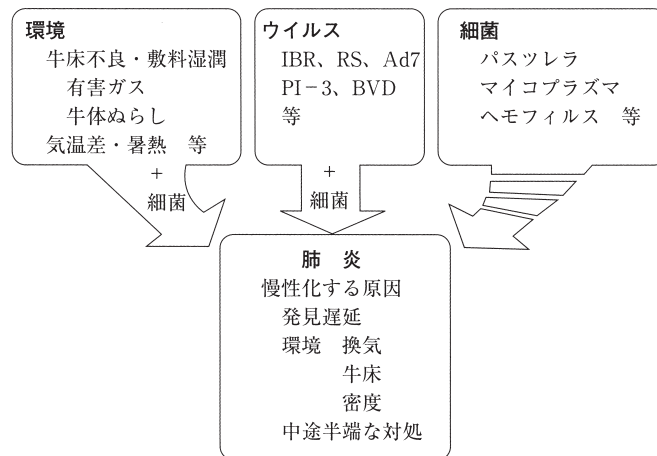


図22 肺炎の原因と発生機序 (長谷川隆 1999)
(農文協「生産獣医療システム 肉牛編」より)

また、肺炎が発生した際には、当該牛の治療と同様に他の同居牛あるいはその後その施設で飼養される子牛への伝播阻止が重要な課題となる。抗菌剤に依存した肺炎への対抗措置はより強力な薬剤耐性菌の発生を促してしまうし、自己判断による加療中止は肺炎の慢性化と当該牛による継続的な病原微生物の拡散を招く。

肺炎が発生した場合は、早期隔離、早期治療、徹底消毒が非常に重要であるので、症状の軽重を自己判断せずに獣医師の診察・指示を受けることが望ましい。消毒薬の選定に際しても耐性菌への考慮を含んだ専門的な知識が必要であるし、適切な予防接種の計画・実施のためにも伝染病等に対する専門知識が必要である。肺炎の予防には、獣医師との連携をしっかりとすることも大切である。

4) 予防接種

子牛の抗体生産機能は、先に述べたように、生後1ヵ月ごろから発達が始まりおおよそ生後5ヵ月ごろに成牛なみの抗体生産が可能になるとされている。生後1ヵ月未満の子牛は、初乳由来の移行抗体の効果があり抗体生産機能が未熟なため、予防接種による疾病発生率の低減の効果は薄い。

予防接種プログラムの作成は、疾病の発生状況や牛の健康状態、飼養環境、衛生管理状況等を検討し、それぞれの地域、場合によっては農場ごとに作成することにより効果